



デデポッポ

Vol. 13

京都市動物園
野生鳥獣救護センター通信
平成23年12月24日発行

タヌキのカイセン症ってなあに？



左の写真は、病気にかかっていない普通のタヌキです。
毛もフサフサしていて、見るからにタヌキだとわかりますよね？
それが、カイセンという病気にかかると…



こんな状態になってしまうのです。全身の毛が抜け落ち、皮膚がまるでゾウのように厚くなっています。
なぜこんなことになってしまったのでしょうか？

タヌキのカイセンとは…？

カイセン症は、皮膚に「ヒゼンダニ」が寄生し、皮膚炎を起こす病気です。

ダニは皮膚の角質にトンネルを掘って潜り込み、産卵します。ヒゼンダニが皮膚に入り込むと、強いかゆみが起こるため、体を掻きむしり、毛が抜けます。皮膚は、発赤・水泡・カサブタなどの形成と共に、厚く堅くなります。

カイセン症のタヌキは、皮膚による体の保護ができなくなるため、抵抗力が低下します。また、掻くことで皮膚が傷つき、細菌による二次感染を起こしやすくなります。

救護されてくるタヌキは、ほとんどが二次感染による敗血症や腎不全などの合併症を起こしており、衰弱して動けなくなってから保護されることが多いため、大半が治療の甲斐なく亡くなってしまいます。

昨年度では、ホンドタヌキが27頭持ち込まれ、うち18頭が重度のカイセン症で、大半の13頭が死亡しました。（5頭は完治し、野生に帰すことができました。）

治療がうまくいき、体調が回復しても、毛が生え揃い再び野生に帰すまでには、とても時間がかかります。

山の中で生きていれば、これ程カイセン症がタヌキに蔓延することはなかったはずですが、近年、宅地開発や里山が放置されることによって、野生動物と人間との距離が近くなっています。

放置されたゴミを漁ったり、餌付けされることによって、タヌキの行動範囲が人間の生活域と重なった結果、ペットからの感染リスクが高くなってしまったのです。

私たち人間がタヌキのカイセン症を増やさないようにするには、ゴミを放置しない・タヌキや野生動物には餌を与えないことが重要です。



また、犬や猫への餌を外にそのまま置いておくと、タヌキが食べに来てしまうことがあります。タヌキが来ないように、残した餌はすぐ片付けるようにする必要があります。

この新聞で、「カイセン症」という病気によって、多くのタヌキが命を落としている現状を知っていただき、野生動物と人間との適正な関わりを理解し、考えてもらえるきっかけになればと思います。